



これから私が6か月のオーストラリア留学で学んだことについてのレポートを記述します。

竜太まず「留学中の学習や研究と特に関係のある多文化共生社会」について申し上げたいと思います。オーストラリアはいままでもなくイギリスの植民地として歴史を始めそしてその後多くの民族の人たちが移住をし、多くの人間が共存をしている場であり、それは日本に居る間は感じることはできませんでした。なぜなら日本はアメリカに一度占領されたと言っても文化そのものが否定されることはあまりなく、自らの文化を切り開いて行きました。しかし私が今回のオーストラリア留学で学んだことは原住民の人々はイギリスに占領された際に無慈悲に自分たちの居住を奪われ、そして水や遺産などの資源も破壊されてしまったということです。私はそれを聞いた時に自分たちの国の中の先住民（特に北海道に住んでいる人たちや沖縄に住んでいる人たち）もそのようなわだかまりを抱えている可能性があるということを理解できました。そう考えるとアメリカなどに占拠されている沖縄の問題などを少し違った目線で捉えることができました。さらにオーストラリアは難民を多く引き受けており、私たちがオーストラリアは多民族国家であるがゆえに多くの難民に対して忌避感をあまり持っていないイメージがありますが、学生の人たちとディスカッションをした時にその中の一人

が、「その難民の人たちが乗っている船にどんな武器が入っているのかをわからないし、自分たちにどのような危険が積もり積もって起こるのかが分からないのでそのようなジャッジは真剣に行ってほしい」と言っていました。私はそのことを聞いたときに、難民国家ならではの国民にしかわからない問題というのがあるというふうに理解ができました。

授業はディスカッション形式であり、特に原住民の問題が絡むと議論は白熱しました。原住民はイギリス人たちが来る前には自らのルールを確立しておりその中で自分たちのルールや罰の執行をしていました。しかし植民地化が進むにつれて西洋人が新しい法律を作り、二つの法律が共存するような状態となってしまいました。具体的には原住民の人たちは紛争の解決の手段として「目には目を」のような解決方法をします。しかし、西洋の法律、つまり私たちが従っている法律はそのようなものではなくて、禁固刑や罰金などのより間接的な紛争処理の方法です。そしてそれにより原住民たちが行った行動が原住民のルールに当てはまらなかったとしても西欧の作った法律には従っておらず罰せられるというような裁判もありました。そういった際に、ある州では原住民のルールを無視し、西欧の作った法律でのみ被告人を罰するというものもありましたが、ほかの州には、原住民たちの意見を聞き、それでもってその文化を尊重しながらの判決を下すというような原住民がより参加できる裁判所が存在している例がありました。それを考えたときにゼロか百かのような二元論で問題を解決するのではなくてさまざまな視点から問題を捉えるということの大切さを知ることができました。それは今までにない意識の変化でした。

それを日本の現実の紛争解決問題、特に私の専攻である労働法に絡めて考えてみたいと思います。日本には現在、労働局という第三者機関があります。労働局が下す「指導、斡旋」は裁判所の下す「判決」に比べてより柔軟なものであり。労働者と使用者の関係を円満に解決する方こと重視をしています。原住民の問題を違った視点から解決することができたように、労働法の解決方法に関しても、裁判所のみを頼るのではなくてそのような第三者機関が使用者や労働者に働きかけることでよりお互いの関係を向上させると考えることができました。